

都道府県別賞一等

優しい声と愛の形

青森県 藤崎町立明德中学校 二学年

佐藤 瑠生斗

「しるべ」

僕の家の玄関を開ける音と同時に聞こえる聞き慣れた声。毎日十八時を過ぎると車通りが少ない住宅街の中にある僕の家は、車のエンジン音が家の中にいても聞こえるくらい静かなのだ。いつものように僕は車のドアが閉まる音と同時に宿題の手を止め、妹の手を引きながら玄関に向かう。

優しい声の主は、「母さん」僕の祖母だ。母さんは、いわゆる「味噌汁が冷めない距離」に住んでいる。というよりも、その冷めない距離に住んだのは僕たちの方である。看護師として共働きをしている忙しい両親に代わって祖父と祖母は僕ら兄弟を大事に育ててくれた。両親に叱られても祖父母だけは必ず味方をしてくれる、僕にとっては大切な存在なのだ。

そしてこの十八時になると、優しい声の母さんが身体に合わない程の大きなスーパーの買い物カゴにびっしりとおかずの入った容器とともにできたての美味しそうな匂いを運んできてくれるのである。雪が降ると鍋いっぱい津軽の料理である「けの汁」を持ってきてくれることもある。何十種類の野菜を気の遠くなるほど時間をかけて刻んで煮込む伝統料理である。それを僕が美味しいと言うと大変さをよそに必ず「また作るね」と言ってくれる母さん。

そんな母さんが突然来なくなってしまった。入院したという知らせを聞いた父母はすぐに病院へ駆けつけた。母さんは自宅で足を滑らせ転んでしまい、手を複雑骨折してしまったそうだ。僕は心配で心配でしようがなかった。今まで入院したことがない母さんが手術をしなければならぬ。僕の母が数年前に大きな手術をした時の経験から、手術はどれだけ大変か知っている。僕は両親に面会に誘われたが病院へは行けなかった。というよりも行きたくなかった。元気じゃない母さんの姿を見たくないと思ってしまった。

手術を終えて、リハビリを重ね、入院は約一カ月にも及んだ。母さんの「いる？」の声が聞けなくなつて一カ月も経ってしまった。ふと、年金暮らしの祖母がそんなに病院にいるとお金がかかってしまうのではないかと感じた。すると、以前生命保険について勉強していた姉が教えてくれた。家族みんな生命保険に入ってるから入院したり手術をしたりしても保障を受けられるのだ。では入院しなかったら損をするのではないか？それが僕の素直な気持ちだった。でもそうではなかった。

第59回中学生作文コンクール

健康な人たちがいざという時のために保険に入っているからこそ本当に必要な人に給付されている。沢山の人が生命保険に加入しているから、僕の母さんも助けてもらった。それが相互扶助という物だと姉から教わった。

僕には何ができるんだろう。生命保険に加入することで、将来自分たちが助けてもらう分、若い人たちがどんどん誰かの役に立つことができる。目には見えない助け合いつてなんだか心が温かくなる。祖父母にはいつまでも元気でいて欲しい。笑うことは病気を寄せ付けないそうさ。

僕は一級建築士を目指している。じいじと母さんだけでなく、みんなが暮らしやすく、そして転ぶことのない家を作ってあげたい。家族みんなで笑いあえる時間を作ろう。そんなことを考えていた時だった。

「いるさ。」

久々に聞いた優しい声。満面の笑みで僕は誰よりも先に駆けつける。まだ痛々しそうな手をした母さんの隣には、代わりにおかずの入った大きなカゴを持ったじいじがいる。涙が出そうになるのをぐっと堪えながら僕はこの二人を一生大事にしていこうと決めた。照れ臭くて言えない気持ちを伝えます。

みんな、元気でいてくれてありがとう!!